栗棟美里 – アーティスト・ステートメント

栗棟美里は、写真を起点に、私たちが「見ている」と信じる像や現実が、どのような条件のもとで成立し、揺らいでいくのかを探究する現代美術家である。デジタル複製、アルゴリズムによる流通、生成AIによって、イメージが現実を説明するだけでなく、現実の理解そのものを形づくる現在、栗棟は〈見ること〉を受動的な行為ではなく、像を成立させる能動的なプロセスとして捉え直している。

近年は、写真を基盤に、レンチキュラー構造、透明アクリルへのUVプリント、AI生成画像、映像などを横断して制作している。《Images》では写真の断片を合成して構築した人物像が鑑賞者の位置によって現れたり消えたりし、《Display》ではAIによって生成されたイメージが透明な支持体へ出力され、光や反射との関係のなかで物質的な存在感を帯びる。《Flashback》では一枚の写真が露出と時間によって記憶のように変容し、《Lost Idea/PhaseⅡ》では既存の写真へのAI生成画像の介入を通して、視覚情報が上書きされ続ける状態を扱う。《Floral Prompt》では、作家自身が撮影した花の写真を出発点に、個人的な希求や美的意図がAI生成と選択を通して像となる過程を探り、物質とデジタルの双方に展開する。いずれのシリーズでも、技術そのものではなく、像がいかなる条件のもとで成立し、現実感を帯びるのかが主題となっている。

こうした制作の背景には、現実が外部に固定されたものとして単純に与えられるのではなく、感覚と認識を通してその都度立ち現れるという考え方がある。栗棟は、仏教思想の一つである唯識を、宗教的教義としてではなく、現代の視覚環境を読み解くための思考の枠組みとして参照している。イメージが直接的な経験を媒介し、記憶や信念の形成にも関与する現在、「現実はどのように見られ、信じられているのか」という問いは、視覚表現の切実な課題となっている。

栗棟の作品において、写真やイメージは証拠や記録という役割だけには収まらず、暫定的かつ変化し得る構造として提示される。像は生成や編集、物質への変換を通して再構成され、鑑賞者の身体移動、見る距離、物質表面、光、時間によっても現れ方を変える。その不安定さは、スクリーンやアルゴリズムを介して絶えず生成・編集・流通する現代のイメージの振る舞いと重なり合う。

デジタル技術と物理的な支持体を交差させることで、栗棟は、イメージの非物質化が進む現代において、その経験に時間、身体性、物質性を引き戻す。像や意味は一度の視線によって確定するのではなく、見る位置や時間、媒体の変化を通して繰り返し立ち現れる。栗棟の実践は、視覚の不確かさや認識の脆さを示すと同時に、現代美術において〈見ること〉そのものを再び思考し、現実がいかに構成されるのかを体験的に問い直す場を提示している。